



Untitled (The Museum Elements #61), 2022 © Gottingham
Image courtesy of Chiba City Museum of Art and Studio Xxingham

会 期 2022年7月16日(土)–9月4日(日)
 休 館 日 8月1日(月) ※休室日 7月25日(月)、8月15日(月)
 開館時間 10:00–18:00(金・土曜日は20:00まで)
 ※ 入場受付は閉館の30分前まで
 観 覧 料 一般 1,200円(960円)、大学生 700円(560円)
 小・中学生、高校生無料
 ※障害者手帳をお持ちの方とその介護者1名は無料
 ※()内は前売り、市内在住65歳以上の方の料金
 ☆ナイトミュージアム割引:金・土曜日の18:00以降は観覧料半額
 ☆本展チケットで5階常設展示室「千葉市美術館コレクション選」も
 ご覧いただけます。
 主 催 千葉市美術館
 協 賛 箔座株式会社、TOKYO ACRYL
 協 力 さふらん生活園、island JAPAN、SCAI THE BATHHOUSE、
 SHISEIDO THE STORE、TARO NASU

誰にとってもいつもとちょっと違う時間に出会い、ささやかで特別な経験をする「夏休み」。本展は、「美術館をときほぐす」「作品と出会い直す」「日常で表現する」という3つのテーマのもと、現代美術家の新作と美術館のコレクション、アート作品とプロダクトといった取り合わせによって、夏休みのような「日常と非日常のあい」という視点から美術館という場所そのものを捉え直すものです。
 いま注目の現代アーティストとさまざまな表現者による、美術館を舞台にしたとっておきの「夏休み」をお見逃しなく。

■14組のアーティスト、表現者が美術館コレクションとコラボレーション

本展では、14組の現代美術家やクリエイターが、千葉市美術館の約1万点のコレクションから作品を選び、ともに展示することで新たな作品を構成します。所蔵作品からは伊藤若冲、田中一村、河原温、杉本博司など近世から現代まで、千葉市美術館のコレクションを代表する作品が登場。現代美術家だけでなく、編集者、デザイナー、また雑貨店などさまざまな表現者たちの目を通して、コレクションや美術館、日常の表現について考え直す機会となります。

※参加作家のプロフィール、コメントは別紙参照

■美術館という場所を考える

中崎透、ミヤケマイ、清水裕貴、津田道子の4名の現代美術家が、展示ケースや学芸員、監視員といった普段展覧会であまり意識されることのない存在を新作インスタレーションに組み込み、千葉市美術館の所蔵作品ともに展示。作品だけでなく美術館をとりまく要素に目を向け、美術館という場所を見つめ直します。

■所蔵された作品と出会い直すこと

2017年と2019年にそれぞれ千葉市美術館で個展を開催した小川信治と現代アートチーム目[mé]は、その際美術館に所蔵された自身の作品と再び対面し、新たなインスタレーションを制作します。以前行われた展覧会から、作家自身の作品への見方はどのように変わっていくか？

■日記、コピー、匂い、雑貨…日常の表現を見つめる

本展では、美術館のような場所だけでなく、日々の生活の中でも多様な表現が生まれていることに注目します。日々の生活や感覚を日記というかたちで表現するさくろ編集室や、毎日決まった時間にコピー機で自分の顔や手を印刷する井口直人、場所や時間、記憶を匂いという切り口で捉え表現する井上尚子。展覧会の最後は、みなさん懐かしの文化屋雑貨店が千葉市美術館のコレクションを元にユニークな雑貨を制作。時代を飛び越えるようなキッチュな文化屋雑貨店らしい空間を生み出します。表現者たちによって連綿と続く日々の制作を紹介し、鑑賞者のみなさんの日常のなかにも表現のかたちを発見する機会となるでしょう。

■ 参加アーティスト・クリエイター プロフィール、コメント

中崎 透



美術家。1976年茨城生まれ。武蔵野美術大学大学院造形研究科博士後期課程満期単位取得退学。現在、茨城県水戸市を拠点に活動。看板をモチーフとした作品をはじめ、パフォーマンス、映像、インスタレーションなど、形式を特定せず制作を展開している。展覧会多数。

2006年末より「Nadegata Instant Party」を結成し、ユニットとしても活動。2007年末より「遊戯室（中崎透+遠藤水城）」を設立し、運営に携わる。2011年よりプロジェクト FUKUSHIMA! に参加、主に美術部門のディレクションを担当。

ここ数年、よく試みている作品形式で、その場所や地域に所縁のある方たちにインタビューをして、その言葉の中から引用したテキストと、その建物や場所に残っていたものや、自作のライトボックス作品などを交えてインスタレーションを組み、土地にまつわる物語を浮かび上がらせるような劇場型の作品シリーズを制作している。今回は美術館の学芸員の方からお話を聞いて、コレクション作品や什器などを交えながらの新作を考えている。

ミヤケマイ



Photo by Satoshi Shigeta

美術家。日本の伝統的な美術や工芸の繊細さや奥深さに独自のエスプリを加え、過去・現在・未来をシームレスにつなぎながら、物事の本質や表現の普遍性を問い続ける。媒体を問わない表現方法を用いて骨董・工芸・現代美術・デザイン、文芸など既存の区分を飛び越え、サイトスペシフィックなインスタレーションを展開している。

主な展覧会は、東アジア文化都市 2018 金沢「変容する家」（金沢 21 世紀美術館、2018 年）、「ことばのかたち かたちのことば」（神奈川県民ホールギャラリー、2021 年）など。2017 年、4 冊目の作品集『蝙蝠』を上梓。京都芸術大学美術工芸学科特任教授。

芸術全般に言えることだと思うが、私と同じことを考えたり、感じたりしている人がいると感じる時、何かほっこりした気持ちになるものである。

今、身の回りにそういう人がいなくても、時空を超えて共感し繋がる。孤独ではなくなる、そこが面白いのだと思う。

清水裕貴



撮影：村松 聡

1984年千葉県生まれ。武蔵野美術大学映像学科卒。風景写真を撮りながら土地の過去や伝説をリサーチし、物語を立ち上げ、写真と文章で表現している。2011年 1wall グランプリ受賞。2016年 三木淳賞受賞。Nikon サロン、Kanzan gallery、nap gallery、PGI などで作品を発表。2021年、神谷伝兵衛稲毛別荘、千葉市美術館 エントランスギャラリー、千の葉芸術祭で作品発表。2018年から小説の執筆をはじめ、新潮社の R-18 文学賞大賞受賞。2019年『ここは夜の水のほどり』（新潮社）、2022年『花盛りの椅子』（集英社）を出版。

誰よりも長く展示室の中にいる、監視係が主役の作品です。ある監視係の人は、休日は海を眺めているそうです。誰の意思も欲望も投影されていない風景で目を洗うために。展示室には作者と鑑賞者の記憶と感情が渦巻いています。そのただなかに立つ人は、鮎物めいた気配をたずさえ、静かに意識を張り巡らせています。

津田道子



アーティスト。インスタレーション、映像、パフォーマンスなど多様な形態で、鑑賞者の視線と動作によって不可視の存在を示唆する作品を制作。

主な個展は、「Trilogue」（TARO NASU、2020年）。主な展覧会に、「アジア・パシフィック・トリエンナーレ」（プリズベン・QAGOMA、2021年）、「あいちトリエンナーレ 2019：情の時代」（伊藤家住宅）がある。2013年東京藝術大学大学院映像研究科で博士号を取得。2019年 ACC のグランティとしてニューヨークに滞在。2021年より金沢美術工芸大学准教授。Tokyo Contemporary Art Award 2022-2024 受賞。

目 [mé]



アーティスト・荒神明香、ディレクター・南川憲二、インストーラー・増井宏文を中心とする現代アートチーム。個々の技術や適性を活かすチーム・クリエイションのもと、特定の手法やジャンルにこだわらず展示空間や観客を含めた状況／導線を重視し、果てしなく不確かな現実世界をわたしたちの実感に引き寄せようとする作品を展開している。

近年の活動に、個展「非常にはっきりとわからない」（千葉市美術館、2019年）、《matter α》《matter β》（ハワイ・トリエンナーレ 2022）などがある。第 28 回タカシマヤ文化基金タカシマヤ美術賞（2017年）、VOCA 展 2019 佳作受賞。

子どものころの夏休み。途方もないくらい退屈に空を眺めていた。空の雲はビタッと止まっていた。日常から抜ける方法がわからず、事実と空想、その両方の中にいた。あれから随分と時間が経った。雲はかたちを止めることなく、めくるめく動き続ける存在になった。この夏休み、千葉市美術館に所蔵された目の作品《アクリルガス》にゆっくりと向き合ってみようと思います。

小川信治



画家。「世界とは何か」をテーマに、時間と空間の構造や人間の意識とのかかわりを描いた超細密な油彩画、鉛筆画、コラージュ、映像作品などを手がける。

主な展覧会に「Shinji Ogawa - I Enter Every Reality」(ポーランド・クラクフ美術館、2019-20年)、「小川信治展—あなた以外の世界のすべて」(千葉市美術館、2016年)、「線の迷宮 II—鉛筆と黒鉛の旋律—」(目黒区美術館、2007年)、「小川信治展—干渉する世界」(国立国際美術館、2006年)、「小川信治展—Souvenir/Souverain」(豊田市美術館、2002年)などがある。

本展では最新作や日常生活から自然に生み出されるドローイングなどを出品しますが、その中で最も謎を孕む油彩画はポルティナーリ家のマリアとマルゲリータを描いた4枚の架空の初期ルネサンス風肖像画です。それぞれの人物の中心で画面を切断し再統合することで世界の全てが表現されています。さらに制作中用いた絵具を順番に塗っていった色見本も同時に展示されており、肖像画と同じ成分でできた別の表れも味わえます。

華雪



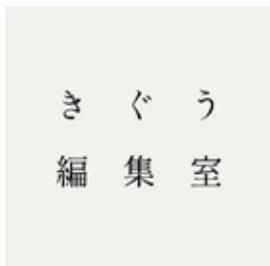
撮影：志鎌康平

書家。1975年、京都府生まれ。立命館大学文学部哲学科心理学専攻卒業。1992年より個展を中心に活動。幼い頃に漢文字者・白川静の漢字字典に触れたことで漢字のなりたちや意味に興味を持ち、文字の成り立ちを綿密にリサーチし、現代の事象との交錯を漢字一文字として表現する作品づくりに取り組む。また、文字を使った表現の可能性を探ることを主題に、国内外でワークショップを開催。刊行物に『ATO 跡』(between the books)、『書の棲処』(赤々舎)など。『コレクション 戦争×文学』(集英社)をはじめ、書籍の題字なども多く手掛ける。

十年前、毎日眠る前(それは夜だったり明け方だったりする)に特別に準備することなく手元にある材料で「日」を書く、というルールを決めた。以来、時折中断しながらも「日」を書き重ねてきた。かさ高く積み重なる「日」の束は日々の記録と記憶そのものように思える。

そこに同時代を生きるあなたの日々をぜひ重ねてみてください。

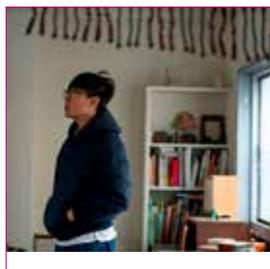
きぐう編集室



〈わたし〉のことを〈わたしたち〉のことへ。毎日のことを、本のかたちで残すプロジェクト。一個人の日記を私家本として編集し、発行している。2017年、東京から千葉に移り住んだことをきっかけに始動。主宰者である「わたし」は筆者と編集者の二役を兼ね、編集過程で自身の記録を他者のように扱い、編み直し、躓きがちな日々をケアする手立てにしている。これまでの発行物に『家を継ぎ接ぐ』(2019年)、『蛇は尾を噛む』(2020年)、『養生避難日記』(2022年)がある。

誰の人生にも起こりうる躓きやため息、小さな喜びについて、こつこつ日記を書いているうちにその量が膨大になり、句読点を打とうと本の形に編集しては、そっと流通させてきました。誰か仲間と呼べる人に出会えるといいなと思って。「表現」というよりは「処方」のような行為の重なりを、そっと置かせていただく予定です。

山野英之



グラフィックデザイナー。デザイン事務所 TAKAIYAMA inc. 主宰。奈良県生まれ。書籍、広告、ブランドデザイン、建築サインなど、平面から空間まで、グラフィックデザインを軸に活動。個人の制作として「クソバッジ」、「B.C.G.」、「YAMANOMAX」、「オールフリー」、「UHS- α」などがある。

世界の全てはクソバッジ。

あなたのゴミは、誰かにとっての宝物かもしれない。

クソバッジはその辺に落ちているゴミクズや、世界の片隅で忘れ去られたようなガラクタに、バッジとしての命を吹きこむ、愛と平等のプロジェクトです。

整然と並べられた様々なオブジェクトは、ピンを付けることによって、元々持っていた意味をはぎ取られ、バッジという新たな存在として生まれ変わります。

さらに「クソバッジ」というバカげた枠組みにより、それぞれの価値は強引にフラットに設定されます。

人はその中から好きな色や形を探すことで、より純粋な自分と出会うことができるでしょう。

あなたにとって大切な一点(クソ)を、ぜひ見つけてください。

Mitosaya 薬草園蒸留所



2016年、千葉県大多喜町の閉園した薬草園跡に設立した蒸留所。自社で栽培する果樹や薬草・ハーブ、全国の信頼できるパートナーたちのつくる豊かな恵みを使い、発酵や蒸留という技術を用いてもづくりを行っている。「自然からの小さな発見をかたちにする」をモットーに、これまでに100種を超える蒸留酒、季節の恵みを閉じ込めた加工品、プロダクトなどをリリースしてきた。

オーナーの江口宏志は、ブックショップ「UTRECHT」元代表。蒸留家クリストフ・ケラーが営む、南ドイツのオー・ド・ヴィの蒸留所、Stählemühle (スティーレミュール) で蒸留技術を学び、特別な一本をつくり続けている。

井口直人×岩沢兄弟



井口直人

1971年生まれ。三重県出身、名古屋市在住。1987年より、社会福祉法人さふらん会 さふらん生活園（障害のある人たちが、モノづくりやアートなどさまざまな活動を通して自分らしさを表現し、まちのなかで緩やかにつながる場所）所属。2003年から、コピー機に自らの顔を押し付けてプリントする「自撮り」を開始。ほどなくして近所のコンビニエンスストアでも朝夕同じ行為を行うようになり、現在まで続いている。

主な参加グループ展は、「ルイジトコトナリー類似と異なり」（はじまりの美術館、2020年）、「ヨコハマ・パラトリエンナーレ2020」（横浜市役所、2020年）など。

岩沢兄弟

「モノ・コト・ヒトのおもしろさのいい関係」を言葉に、人や組織の活動の足場となる拠点づくりを手掛けるクリエイターユニット。兄弟ともに千葉県千葉市生まれ。空間・家具などの立体物設計、デジタル・アナログ両方のツールを活用したコミュニケーション設計、オフィス空間からアートプロジェクトの拠点づくりまで幅広く活動している。千葉市美術館での「つくりかけラボ06 岩沢兄弟|キメラ遊物園」に続き、「瀬戸内国際芸術祭 2022」では「鬼ヶ島ピカピカセンター」を制作。

コンビニのコピー機を使った井口さんの活動を実際に拝見して、井口さんの日常が街に溶け出し、コンビニ店内に非日常空間が立ち現れたような気がしました。そんな日常のルーティンをちょっとズラすことで見えてくる景色に私たちも興味があります。展示を通じて、そんなズレをみなさんと一緒に体験できればいいなと思っています。



井上尚子



撮影：うつゆみこ

美術作家。匂いと記憶をテーマに体感型作品を制作。環境、文化、歴史を匂いから楽しむ「くんくんウォーク」を国内外の教育機関、美術館、植物館、公園、空港などで実施。2017年、ミュンヘンにある Museum Villa Stuck in Munich にて展覧会とワークショップ「The Library of Smell」(collaboration with 嗅覚研究者・白須未香 + サウンドアーティスト・柴山拓郎)を開催。2017～2020年、WWF ジャパンと全国の動物園とプログラム「においでめぐる動物園」を共同開発し、2019年グッドデザイン賞受賞。2005年文化庁芸術家在外研修員として、ニューヨークに滞在。

美術館が育む“においの記憶”は、気がつかないところに隠れています。展示作品と人の往来が展示室の匂いをつくり、古美術と現代美術の収蔵室の匂いは異なり、収蔵庫に彩りを与えます。そして、今も尚、眠り続けるカタログたちは今夏、偶然の日覚めを迎えます。美術館の匂いに触れ、蘇る自らの記憶を夏休みの作品としてお楽しみください。

文化屋雑貨店



1974年、長谷川義太郎が渋谷にて開店した雑貨販売企業。1946年千葉県富里生まれ、東京下町育ち。武蔵野美術大学商業デザイン科卒。装丁家・菊地信義氏のデザイン事務所に3年間勤務したのち、文化屋雑貨店を開店。雑貨店の草分け的存在として、デザイナーのポール・スミス氏など、国内外問わず多くのファンを持つ。2015年の閉店後も神出鬼没に活動を続けている。香港・文化屋雑貨店、(元)鶴谷洋服店(神保町)では、文化屋雑貨店オリジナル商品を送り込んでいる。

雑貨屋が美術館にお呼ばれ?これ文化屋大革命ですね。物を追いかけて50年、実は人を追いかけてきました。人にぶつかるとその先に物が出現する。次から次へと物と人が現れ50年。文化屋雑貨店の本は、大書店ではどの分野に置かれているか分かりません。友人曰く、土農工商文化屋雑貨店!つまり社会の範疇外。

(new) servise[西館朋央+佐久間磨]



西館朋央と佐久間磨 (Rondade) を中心に空間設計、什器等の制作を提供するプロジェクト (サービス)。既存のフレームワークに新たな関係性を見出し、自ら介入することで発生する場の揺らぎをオブジェクト (サービス) として捉え直す試み。

西館朋央

作家として展覧会を行うほか、雑誌や広告のグラフィックから店舗のアートやディスプレイなど、平面から空間まで、さまざまな媒体で活動する。2018年より千葉市にスタジオを構え、2021年、自身のプレゼンテーションの場として、gallery(NEW FOLKS)を立ち上げる。

Rondade(佐久間磨)

さまざまなアートフォームを創造の初期衝動に立ち返り、既成の枠に捉われないかたちと方法で表現することを目的に設立されたレーベル。本の形態はもちろんのこと、制作や販売方法も含めてユニークな出版を実践している。アートブック『富井大裕：関係する | Interact』、伊丹豪『photocopy』などを出版。

■ 展覧会関連イベント

内容やイベントが変更になる場合があります。詳細は美術館ホームページをご確認ください。

★のイベントは事前申込制につき、詳細、申込方法を美術館ホームページでご確認ください。

■ライブパフォーマンス 「一」を書く

出演：華雪(本展出品作家、書家)、石引康子(琵琶)

7月16日(土)11:00～11:15/1階さや堂ホールにて/先着50名/無料

★アーティストワークショップ くんくんウォーク

講師：井上尚子(本展出品作家)

7月17日(日) ①10:30～12:00 ②14:00～15:30/7階展示室他/定員各6名/7月6日(水)申し込み〆切/無料(要展覧会チケット)

★ライブパフォーマンス Inspire～ストラスブールの夜

出演：小川信治(本展出品作家、ライブペインティング)、平手裕紀(キーボード・トランペット)、岩持芳宏(バスクラリネット)、影山宣明(映像)

7月24日(日)18:15～19:30/7階展示室にて/定員15名/7月13日(水)申し込み〆切/無料(要展覧会チケット)

★アーティストワークショップ 「日」を書く

講師：華雪(本展出品作家)

7月31日(日) ①13:30～15:00 ②16:30～18:00/5階ワークショップルームにて/定員10名/7月20日(水)申し込み〆切/無料

★鑑賞プログラム シュワー・シュワー・アワーズ

協力：手話マップ

8月13日(土) ①11:00～13:00 ②14:30～16:30/5階ワークショップルームにて/定員各6名/15歳以上/8月3日(水)申し込み〆切/無料(要展覧会チケット)

★鑑賞プログラム とある日の言葉を集める～目の見える人と見えない人の鑑賞ワークショップ

講師：視覚障害者とつくる美術鑑賞ワークショップ

8月21日(日) ①10:30～12:30 ②14:30～16:30/7・8階展示室、5階ワークショップルームにて/定員各6名/中学生以上/8月10日(水)申し込み〆切/無料(要展覧会チケット)

■上映会 「コロナ禍における緊急アンケートコンサート 声の質問19/19 Vocal Question」記録上映

出演：アサダワタル(アーティスト、近畿大学文芸学部教員/本作総演出担当)

8月7日(日) 14:00～16:10(13:30開場予定)/11階講堂にて/先着80名(当日12:00より1階にて整理券配布)/無料

■市民美術講座 とある美術館の夏休み

講師：畑井恵(当館学芸員)

8月28日(日) 14:00～(13:30開場予定)/11階講堂にて/先着80名(当日12:00より1階にて整理券配布)/聴講無料

★託児サービスデー

7月30日(土)、8月28日(日) 13:00-16:00

■ 記者レクチャー・内覧会

一般公開に先駆けて報道関係の皆様を対象に、記者レクチャーおよび内覧会を行います。展覧会の見どころを担当学芸員よりご説明し、その後展示室をご覧ください。また、本展出品作家が登場予定です。

7月15日(金)15:00-17:00(14:30開場)/8階展示室にて

参加ご希望の方は、同封の申込書に必要事項をご記入の上、FAX またはメールにてご連絡ください。

■ 同時開催

常設展「千葉市美術館コレクション選」

5階常設展示室 [休室日]第1月曜日 [観覧料]一般300円 大学生220円(企画展ご観覧の方は無料)

「つくりかけラボ08 堀由樹子|えのぐの森」

7月13日(水)～10月2日(日) 4階子どもアトリエ [休室日]第1月曜日 [観覧料]無料

■ 次回展予告

2022年9月14日(水)～11月3日(木・祝) 「新版画 進化系UKIYO-Eの美」

2022年10月13日(木)～12月25日(日) 「つくりかけラボ09 大小島真木|コレスポンダンス/Correspondances」

※展示やイベントの内容などが変更になる場合があります。最新の状況はホームページをご確認ください。

※館内にて新型コロナウイルス感染拡大防止対策を行っております。

・体調のすぐれない方の来館はご遠慮ください。・咳エチケット、マスク着用、手洗い・手指の消毒の徹底にご協力ください。

広報用画像データ・プレゼント用招待券申込書

■写真ご使用に際してのお願い

- *作品写真の使用は、本展のご紹介をいただける場合のみとさせていただきます。 *写真のご利用は、1申込について1回とし、使用後のデータは破棄してください。
- *基本情報確認のため、広報担当まで一度校正紙をお送りください。 *掲載後、広報担当まで見本誌をご送付くださいますようお願いいたします。
- *お手数ですが、招待券プレゼントの受付、発送などは、貴編集部にてお願いいたします。原則として、掲載紙をご送付いただきました時に招待券をお送りいたします。

貴社名：	媒体名：
ご担当者名：	発行予定日：
TEL：	発行部数：
FAX：	定価：
Email：	掲載予定コーナー名等：
画像到着希望日： 月 日 時まで	画像の掲載サイズ <small>(おおよそで結構です 例：5cm 四方、など)</small>

■画像データ申込 (ご希望のデータの番号に○をつけてください。)



1 伊藤若冲《鸚鵡図》宝暦(1751-64)後期～明和期(1764-72)頃 千葉市美術館蔵(展示期間:7月16日～8月14日)



2 ミヤケマイ《アート&デザインの大茶会》大分県立美術館、2018年 Photo by Satoshi Shigeta



3 津田道子《あなたは、翌日私に会いにそこに戻ってくるでしょう。》NTTインターコミュニケーション・センター(ICC) 2016年 Courtesy of TARO NASU Photo by Tadasu Yamamoto



4 恩地孝四郎《白亜(蘇州所見)》昭和15年(1940) 千葉市美術館蔵



5 小川信治《ストラスブール》2015年 千葉市美術館蔵



6 華雪《日》2021.11.11)2021年 作家蔵



7 文化屋雑貨展による出品物イメージ(掛け時計、ポーチ、プリント軍手)

※上記以外の作品画像をご入用の場合は別途ご相談ください。

■「とある美術館の夏休み」プレゼント用招待券申込

(ご希望の場合はチェックをつけてください)

5組10名様分 希望します。

(それ以外の枚数が必要な場合は別途ご相談ください。)

チケット送付先

ご住所：〒

問い合わせ先

千葉市美術館

〒260-0013 千葉市中央区中央3-10-8

広報担当：磯野 愛

Tel. 043-221-2311 (代表) /043-221-2313 (直通)

Fax. 043-221-2316 E-mail. isono@ccma-net.jp

記者レクチャー参加申込書

Summer Vacation at a Certain Art Museum とある美術館の夏休み展



記者レクチャー・内覧会 7月15日(金) 15:00～17:00 8階展示室にて

報道関係の皆様を対象に披露説明会および内覧会を行います。
展覧会の見どころを担当学芸員よりご説明し、その後展示室をご覧ください。
また、当日滞在中の出品作家も登壇予定です。

[タイムスケジュール(予定)]

14:30～ 記者レクチャー会場開場
15:00～ 担当学芸員より展示室にてご説明
15:15～ 自由内覧

参加ご希望の方は下記項目にご記入の上、

FAX: 043-221-2316 または **E-mail: isono@ccma-net.jp**

までご返信ください。

ご芳名

ご所属

貴媒体名

お電話番号

E-mail

問い合わせ先 広報担当 磯野 愛
Tel. 043-221-2313 (直通)

千葉市美術館
〒260-0013 千葉市中央区中央3-10-8
HP: <https://www.ccma-net.jp/>